

令和3年度
興南中学校
入学試験問題

後期

国語

令和3年2月6日（土）実施 45分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は45分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、小学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】 次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧^{ていねい}に記入せよ。

もつとも、誤字の大家^{*1}であるわたしをもしのぐ、大誤字の巨匠連^{*4}がこのごろ各大学をわんさと徘徊^{*6}しているらしい。その巨匠連^{*1}の漢字^①に対する知識がいかにすさまじく貧弱^②であるか、ここにその例を掲げよう。これは東京山手のさる大学(特に名を秘す)で収集されたものである。

沖繩変換(返還^{へんかん})

他国に浸入する(侵)

粉争(紛争^{ふんそう})

こんな時制(時世^{じせい})

新見な体度(真剣な態度^{たいど})

毎日の苦らし(暮らし)

全題未聞(前代未聞^③)

基調な青春(貴重な)

万千の処置(万全)

見識と氣白(氣迫^{*7})

混乱を縮正する(肃清する^{*8})

筋張する(緊張する)

無規道な行い(無軌道^④)

角命分子(革命分子^{*9})

学校から返る(帰る)

価格狂定(協定)

春画、秋冬(春夏秋冬)

士農高商(士農工商^{*10})

書き写しているうちにどうも妙な氣がしてきた。わたしは前に「その巨匠連の漢字に対する知識がいかにすさまじく貧弱であるか」などと書いたが、どうもそう思つては間違ひではないかという氣がしてきたのだ。 ※ 「毎日の苦らし」など、すばらしい誤字ではないか。インフレ地獄^⑤、交通地獄^⑥、公害地獄のなかであくせくと生きているわたしたちの毎日は「暮らし」というより「苦し」の方がはるかにふさわしかろう。「角命分子」も言^{*12}いて妙である。「角棒」をふりまわすから(もつともちかごろでは鉄パイプやハンマーであるが)「角命」なのだ。「価格狂定」もまた然^{*13}り、企業家たちのぶつ高い統一価格の決め方をみていると狂つていしか見えぬ。「春画秋冬」にもうな「A」ける。この十年来、暖^{あたたか}い冬や冷たい夏の異常氣象つ「B」きであるから、文字の方だつてへんてこりんにならざるを得ない。「士農高商^⑦」と書いた学生には尊敬^⑧の念^⑨さえおぼえる。

【語注】

- *1 もつとも 前の内容に補足する場合に用い(例…ただし)、この直前には筆者が誤字の大家であると述べられている
- *2 大家 学問や芸術などの分野で尊敬されている人
- *3 しのぐ 能力が相手より上に出る
- *4 巨匠連 巨匠は芸術分野で業績ぎょうせきをあげた人のこと、巨匠連は筆者が作った語で巨匠たちの意味、大学生をさしている人や物が一度にたくさん集まるさま
- *5 わんさ あてもなく歩きまわること
- *6 徘徊 はげしい意気込み
- *7 気迫 きびしくとりしまること
- *8 粛清 社会を急に変えようとする人(人々)のこと
- *9 革命分子 江戸時代の身分制度を表した言葉、武士・農民・職人・商人の職業別に社会的身分を定めたもの
- *10 土農工商 持続的にモノやサービスの価格が上昇する現象じぞくのこと
- *11 インフレ うまく言い当てているさま
- *12 言いえて妙 そうである、その通りである
- *13 然り

問一 傍線部①「漢字」に関して、(一)～(三)の部首名を例にならってそれぞれ答えよ。(例 部：「おおざと」「とのみ解答」)

- (一) 家 (二) 識 (三) 間

問二 傍線部②「弱」の総画数を漢数字のみ答えよ。

問三 傍線部③「前代未聞」の意味として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 今までに聞いたことがなく、珍しくて未経験であること。 イ 何度も人から聞くより、一度見るほうが確実であること。
ウ 何度失敗してもくじけずに、立ち向かって努力すること。 エ 他人から注意されても聞く耳を持たず、反応しないこと。

問四 傍線部④「無軌道」とは「ものごとがすすむ道筋」を意味する「軌道」に、打消しの漢字「無」が付くことで「行いがでたらめである」という意味になる。これと同様に、(一)～(三)の□に入るものとして最も適当なものを、「非・不・未・無」から一つずつ選んで答えよ。

- (一) □現実 (二) □成年 (三) □利益

問五 傍線部⑤「そう」が指す内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 夏目漱石が当て字の大家であること。 イ わたしは誤字の大家かもしれないこと。

ウ 大学生の漢字に対する知識がすさまじく貧弱であること。 エ 書き写しているうちに妙な気がしてきたこと。

問六 本文中の※に入る接続語として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア さらに イ たとえば ウ しかし エ だから

問七 「A」「B」に入るひらがなの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア (A づ・B づ) イ (A づ・B ず) ウ (A ず・B づ) (エ A ず・B ず)

問八 傍線部⑥「土農高商」とあるが、これに対し筆者はなぜ「尊敬の念さえおぼえる」と言ったと考えられるか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 「高商」と書くことは、学習した内容を間違えて覚えていることになるがそれでも答えようとする気持ちが見られるから。

イ 「高商」と書くことは、誰からも尊敬される存在であった江戸時代の商人の実態を描こうとする気持ちが見られるから。

ウ 「高商」と書くことは、「高」と「商」の漢字のつくりが似ているためすぐに気づく人も少ないだろうと考えられるから。

エ 「高商」と書くことは、江戸時代の商人がお金をたくさんもうけることで、他よりも地位が高くなっていると考えられるから。

問九 傍線部⑦「尊敬の念」とは他者に敬意を表す言葉である。次の各文の傍線部を正しく敬意を表す言葉に直し、指定された字数に合わせて答えよ。

(一) 校長先生はおりますか。(六字)

(二) 私は今日の給食もおいしく召し上がりました。(四字)

※問題は次に続く

【二】次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。

1 人間の叡智（*1 えいち）をもって克服（こつく）しようとした睡眠（すいみん）は、起きている時の人間に特有な高次の脳機能や豊かな感情と違って、他の生物と共通の仕組みで制御（せいぎよ）されている。^①眠っている時には、私たちは人間でなく霊長目に属するただの哺乳類（ほにゅうるい）になる。人間に特有の高度な判断能力やフクザツ（*2 ふうさつ）な心の働きを考えずに、哺乳類の一種という視点で研究を進めることが睡眠研究の前提となる。

2 およそ数億年前から地球上の環境が生物の繁栄（はんえい）に好ましいもの（*3）に変わってきた。植物が繁殖（はんしょく）し、食物が豊富になった。こうした中で、脊椎動物（せきつい）の中から恐竜や鳥類、哺乳類といった恒温動物が出現した。恒温動物は、それまで繁殖していた魚類、両生類、爬虫類（はちゅうるい）と異なり、エネルギーを燃やし続けることで常に体内の温度を一定に保っている。外気温が低くなると活動ができなくなる変温動物と比べて、身体（*4）の内部環境を自ら一定のレンジ（*5）に保つことのできる恒温動物では、環境に対する適応力は大幅に飛躍（ひやく）した。反面、体温を保つために常にエネルギーを燃やし続けなければならず、変温動物と比べると大量の食物が必要となった。そのため、食物の欠乏（けつぼう）にはひどく弱い。

3 鳥類や哺乳類のような恒温動物は、さらに内外からの情報を処理し、身体をよりうまく働かせるための脳を発達させた。脳（*6）の発達によって適応力は飛躍的に高くなった。その頂点（*7）にいるのが人間である。しかし、これらの高等動物で発達した脳は、体温を一定に保つ恒温動物としての限界をさらに超えて、膨大なエネルギーを消費する。そして、活性酸素（*8）のような有害な老廃物も産出するし、機能変動が起こりやすいという脆弱性（*9）を持つ。長時間働かせていると身体が供給できるエネルギー量では足りなくなる。これを防ぎ、脳をうまく働かせるために休息を上手に管理する技術が不可欠になった。これが睡眠であり、身体が休む時間帯に脳をうまく鎮静化（*10）して休息・回復させ、必要な時に高い機能状態の覚醒（*11）を保証する機能を持つに至った。つまり、高等な哺乳類にとつ

て、睡眠とは、身体が休む時に、脳の活動をしっかり低下させ休養させるシステムなのだ。

④このシステムは実は意外にシンプルな仕組みでできている。体内の温度を積極的に下げること、まるで変温動物のようになって脳と身体をしっかりと休息させるのだ。皮膚から熱を積極的に逃がすシステムが働くと、身体の内部の温度が下がると同時に、頭の内部にある脳の温度が下がっていく。体内の温度が下がると、生命を支えている体内の化学反応が不活性化する。つまり代謝が下がり、休息状態になる。

⑤人間は手先や足先から熱を逃がすシステムが作動すると、体内の温度、そして脳の温度が下がり始めだんだんと眠くなることが一九九九年に明らかにされた。赤ちゃんの手が温かくなるのは眠たいサインだとよくいわれるが、これは生理学的にも正しい。熱を逃がして脳の温度を下げ、眠気を誘って脳を休ませているのだ。大人も同様に、夜になると自然に眠たくなるのはこうした機構が働いているからだ。冷え性で手が冷たくなりやすい人は、熱を逃がすのが下手で不眠になりやすいということがわかった。熱を逃がす時に重要な働きをするのは、手背（手の甲）、足背（足の甲）、太ももの内側などである。こうした皮膚部分はラジエーターの役割をしているとも考えられる。

⑥一日の中での眠気の変動は体内の温度と連動している。徹夜で帰宅した後、昼間に眠ろうとしてもぐっすり眠れないのは、昼間なので体内の温度が上昇したままの状態だからだ。時差ぼけでなかなか眠れないのも同じ理由だ。時差地域で昼間に眠たくなるのは体温が下がっている時にあたるからだ。恒温動物となつて、大脳が発達するにしたがつて睡眠が発達してきたことから考えると、活動のために体内温度を保つて生活する動物が体内の温度を下げ、脳の温度も下げ、これを強制的に休ませることに睡眠の意義がある^③と考えていいだろう。

【語注】

- *1 叡智 すぐれた知恵、深い知性
- *2 高次 次元の高いこと、程度や水準が高いこと
- *3 霊長目 ヒトやサルの間
- *4 レンジ 範囲、広がり
- *5 活性酸素 反応性の高い化合物に変化した酸素
- *6 老廃物 体内で栄養を作り出す際に生じた不要物
- *7 脆弱性 もろくて弱い性質
- *8 鎮静化 高ぶった気分をしずめ落ち着かせること
- *9 覚醒 目が覚めること
- *10 生理学 生物の機能を研究する学問
- *11 機構 組織を組み立てている仕組み
- *12 ラジエーター 液体や気体の熱を逃がす装置

問一 二重傍線部 a～c のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直して答えよ。

- a フクザツな心の働き
- b 生物の繁栄に好ましいもの
- c 自ら一定のレンジに保つ

問二 二重傍線部 d「保証」とあるが、これと同じ漢字を用いる例文を次のア～ウから選び、記号で答えよ。

- ア 権利をホシヨウする イ 品質をホシヨウする ウ 損失をホシヨウする

問三 傍線部①「眠っている時には、私たちは人間でなく霊長目に属するただの哺乳類になる」とはどういうことを述べているか、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 睡眠研究は、人間を哺乳類の一種という視点で、研究するということ。

イ 哺乳類の頂点にいるのが人間であり、その人間も睡眠は必要だということ。

ウ 人間の知恵をもって睡眠を克服しようとしても、睡眠の仕組みは他の生物と共通であるということ。

エ 人間は他の恒温動物と同様に、睡眠によって赤ちゃんから大人へ成長するということ。

問四 次の(一)～(四)は、恒温動物、変温動物のいずれに当てはまるか。後の【選択肢】からア・イのどちらかを選び、それぞれ記号で答えよ。ただし同じものを何度用いても構わない。

(一) 魚類、両生類、爬虫類 (二) 体温を保つために常にエネルギーを燃やし続けている

(三) 食物の欠乏にひどく弱い (四) 外気温が低くなると活動ができなくなる

【選択肢】 ア 恒温動物 イ 変温動物

問五 傍線部②「冷え性で手が冷たくなりやすい人」について、次の会話文は本文を読んだ興くんと南さんが話している内容である。

「 」「 に当てはまる内容としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

興くん…冷え性の人は眠りづらいんだね。

南さん…私のお母さんも冷え性だから、不眠に悩んでいるの。

興くん…眠くなるには手足や足先から熱を逃がすシステムを作動させるといいんだよね。

南さん…そうね、冷え性の人はもともと手足が冷えているから、熱を逃がしにくいっていうことね。

興くん…それならお母さんに、寝る前に「 」ことをアドバイスしたらいいんじゃないかな。

ア 入浴する イ クラシック音楽を聞く ウ ストレッチなどで体を動かす エ 温かい飲み物を飲む

問六 傍線部③「睡眠の意義」とあるが、人間にとって睡眠の意義とは何か。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 身体が休む時に脳の活動をしっかりと低下させ休ませること。 イ 恒温動物に必要なエネルギーを生み出し続けること。

ウ 夜間のみならず昼間にも活動できるようになること。 エ 気持ちを落ち着かせ集中力を向上させること。

問七 本文の各段落の役割について、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア [1]段落は事実を述べて文章のテーマを示している。

イ [2]段落と[3]段落は互いに異なる意見を展開して論を深めている。

ウ [4]段落と[5]段落は筆者の経験を述べてまとめている。

エ [6]段落は新たな問題を提示して読者に問いかけている。

【三】 次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。

主人公の「おとし」は、宗吉そうきちという青年と結婚が決まっている若い娘である。いつものように伯父おじの茂七もしちと伯母おばのお里夫婦おさとのもとを訪れて話をしていると、茂七を訪ねていた若い娘「お吉きち」を目にする。お吉は役人の仕事にかかわる茂七に会いに来ては、「人を殺した」とでたらめの告白ばかりをしていた。あるとき、おとしは偶然お吉に出会い、なんとなく一緒に時間を過ごすことになる。そこで若い娘ばかりねらってカミソリで顔を切って歩く「顔切り」におそわれそうになったが、お吉に助けられる。次の文は、助けられたときに気を失ったおとしが、叔父夫婦の家で目を覚まし、宗吉を含めた四人で話をしている場面である。

「お吉さんのことも、わからないわ。あの娘、『馬鹿囃子*1聞いた？』って言ったの。『あんただって馬鹿囃子*1じゃないか』とも言ったわ。顔切りからあたしを助けてくれたときも、そう言ってた……どういふことなんだろう」

茂七は、蒸しアツaい夜にはこれがいいんだといって、わかしたばかりの熱い麦湯*2を飲んでいた。汗あせを流し、しかめ面①をして。だが、話し始めると、もつとキビbしい顔になった。

「お吉という娘は、これ以上ないってぐらいのまともな娘だったんだがな。それがかえっていけなかったのかもしれん。あんなふうになつちまつたのは、縁談*3が壊れたせいだったんだよ」

お吉のふた親が言うことには、最初、それはいい縁に見えたのだという。*4日本橋通町の雑穀問屋ざつこくどんやの作せがれで、様子のいい男だった。

お吉はのぼせあがっていたし、先方もお吉の「A」した明るいところを気に入って、話は「B」進んでいた。②それが駄目だめになったのは、相手の男が突然恋とつぜんにおちたからである。もちろん、相手はお吉ではない。

「申し訳ないとは思っています」と、男は畳たたみに手をついた。「こんなことなら、もっと早くにはつきり申し上げていれば良かった。てまえは最初から、お吉さんにはどうもあきたらないところがありました。なんというか……てまえには、お吉さんをきれいだとは思えませんが——」

③ 随分ずいぶんな話だわ。ひどい男」

おとしはそうやってしまってから、自分もいつか、「お吉は家かみつきでないと嫁よめのもらい手がないだろう」というようなことを言ったのを思い出した。恥はじ入はって、茂七から目をそらした。

「お吉の縁談はもうおおっぴらな話になっていたから、こんな壊れ方は、泥鰌どろまんじゅう頭あたまをぶつけられたもおなじだった」
茂七は頭を振った。

「それだけでなく、お吉は子供の頃から、きれいな姉さんたちと比べられて、淋さびしい思いをしてきた娘だ。男の言葉はこたえただろうな：それからだよ。少しずつ歯車みよこが妙まよになってな。みんな自分の顔を指差して笑っている、と思い込むようになった。そして、そんなことを言ったやつはみんな殺してやるんだと心に決めて——」

「でも、やったのは頭のなかだった。言葉だけで、どんどん殺していったんだわ」
おとしは、お吉のどっしりとした横顔を思い浮かべた。

「本当に手をくわだして人ひとをあやめることまではできなかつたんですね」
宗吉の言葉に、茂七は深々とうなずいた。

「だから、俺はお吉はよくなるんじゃないかと思っている。持ち前の、優しい心根こころねまではなくなっていないということだからな」
「あたしのこと、助けてくれたときのことは？」

お里が（いいでしょう？）という顔で茂七を見、そして言った。

「あれは——お吉さんがね、あの顔切り男が、おとしちゃんじゃなくて自分の顔を切りにきたと思って、やっつけたらしいのよ。番屋でもそう言ってたって。ねえおまえさん」

みんながあたしの顔を指差して笑ってる。そんな汚い顔はいらないと切りにくる。

おとしは目を閉じた。

馬鹿囃子。夜中に目を覚ましたとき、どこからともなく聞こえてくるにぎやかな笛太鼓^{たいこ}。どこの誰がやっているのかわからないけど、たしかに耳に届く。遠くなったり、近くなったりしながら。

お吉はその馬鹿囃子に、自分をはやす声を重ねて聞いていたのだ。

「あんただって馬鹿囃子じゃないか」

狂^{くる}った頭のなかで、なんの脈絡^{くわくらく}もなく誰にもかれにも投げつけられていた言葉。しかし、おとしに向けて言われたときは、それは悲しいほどに正しかった。かの女もまた、襖^{ふすま}の陰^{かげ}で、お吉を笑ったことがあるのだから。

①「ごめんね」とつぶやいて、おとしは手で両目を押さえた。

耳の奥で、かすかに笛太鼓の音を聞いたような気がした。

【 宮部みゆき「馬鹿囃子」『はじめての文学 宮部みゆき』（文藝春秋）より一部抜粋 ※問題作成の都合上、一部改変 】

【 語注 】

*1 馬鹿囃子 東京およびその近郊の祭りの一つ、本作品では、夜中にふと目をさますと、どこからともなくお囃子が聞こえてくるが、場所がわからず、翌朝調べても夜中そんなお囃子はやっていない、という七不思議の一つ

*2 麦湯

麦茶

*3 縁談

結婚話

*4 日本橋町の倅

日本橋町に住む雑穀問屋の息子、ここではお吉の縁談相手をさす

*5 てまえ

問屋とは、他の者から仕入れた商品を直接販売する者などにおろす職業（業者）のこと
自分のことをへりくだってという語、わたくし

*6 あきたらない

十分に満足できないこと

*7 家付き

娘が生家について婿むことりすることをさしている

*8 あやめる

殺すこと

*9 番屋

江戸時代、町村に召し抱えられて火の番や盗人の番にあたった者がいた小屋、番人の出勤しているところ

問一 二重傍線部 a、c のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直して答えよ。

a 蒸しアツい夜

b キビしい顔になった

c なんの脈絡もなく

問二 傍線部①「しかめ面」、②「のぼせあがって」のここの意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

①「しかめ面」

ア 不快そうな顔

イ 嬉うれしそうな顔

ウ 緊張きんちやうした顔

エ 残念そうな顔

②「のぼせあがって」

ア 夢中になって

イ 覚悟かくごを決めて

ウ 楽になって

エ 不愉快になって

問三 次の「A」「B」に当てはまる語句として最も適当なものを次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア がたがた

イ とんとん

ウ のろのろ

エ ペたぺた

オ はきはき

問四 傍線部③「随分な話だわ」とあるが、どのようなことに対して述べたものか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 縁談相手が、他に好きな人がいたのにも関わらずお吉との縁談を進めたこと。

イ 縁談相手が、縁談を壊した時にお吉の顔がきれいだと思えないと言ったこと。

ウ 縁談相手が、他に好きな人が出来たとうそまでついて縁談を壊したこと。

エ 縁談相手が、お吉のお金を目当てにして縁談を進めていたこと。

問五 傍線部④「恥じ入って、茂七から目そらした」とあるが、おとしがそのようにした理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 縁談を進めておきながらお吉以外の別の人を好きになった縁談相手に対して腹立たしさを感じたが、他人の恋に口を出すべきではないと気が付いたから。

イ 外見を理由に急に縁談を断られたお吉が可哀想だと思っ怒っていたが、感情的になり普段使わない乱暴な言葉づかいをしてしまったこと気が付いたから。

ウ 別に好きな人が出来たと縁談を駄目にしてしまったお吉の縁談相手に対して驚きを感じたが、お吉の縁談が上手くいくはずないと自分自身で言っていたと思出したから。

エ まとまりかけていた縁談を壊した相手に対し初めは怒っていたが、自分もお吉の容姿を笑い失礼なことを言っていたことを思い出したから。

問六 傍線部⑤「泥饅頭をぶつけられた」とはどういうことか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 縁談が壊れたことを周りの人々が面白がり、泥を投げるようになったこと。

イ 縁談が壊れたことでお吉の精神が不安定になり、うそをつくようになったこと。

ウ 縁談が壊れたことを友人にも知られ、友だちとも仲が悪くなったこと。

エ 縁談が壊れたことを周りにも広く知られ、お吉が恥をかかされたこと。

問七 傍線部⑥「俺はお吉はよくなるんじゃないか」とあるが、その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 幼いころから心優しい娘であり、人をあやめてしまったとしても、優しさが完全になくなるわけではないと思ったから。

イ ひどい振り方をした縁談相手に対してうらみごとをひとつも言わず、悲しみを乗りこえていこうと努力しているから。

ウ 自分を笑った人を言葉で殺したとはいっても、実際に傷つけたことはなく、幼い頃の優しさは消えていないと思ったから。

エ 恐ろしい顔切り男に対して勇気を出して立ち向かい、自分の身をぎせいにしてもおとしのことを助けようとしたから。

問八 傍線部⑦「ごめんね」とあるが、この時の「おとし」の心情として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア お吉を助けてあげられたことにに対し安心しながらも、伯父さんや伯母さんに心配をかけてしまい、軽はずみに顔切りに向かった自分の行動を反省する気持ち。

イ 悪口を言っていたことをお吉本人に聞かれていたことに気づきお吉に対し申し訳なく思うとともに、これからどのように接すれば良いのか分からず戸惑う気持ち。

ウ 顔切りから自分を守ってくれたことに感謝しつつも、自分の身を大切にせず相手がしたことばかりを気にするお吉を腹立たしく思う気持ち。

エ 以前はお吉の容姿をばかにしていたことがあったが、顔切りから自分を守ってくれたこと感謝しつつも、お吉に対していつも申し訳なく思う気持ち。

問九 次に示すのは、この作品を読んだ生徒が内容や表現について話している場面である。内容や表現の特徴として当てはまらない発言をしているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 生徒A 「どこからともなく自分をからかう声が聞こえてくるといのは、とても悲しいだろうね。お吉は、お祭りの囃子である『馬鹿囃子』と自分をはやして馬鹿にする声を重ねて聞いていたんだね。」

イ 生徒B 「なるほど。お吉はおとしに『あんただだって馬鹿囃子じゃないか』と言われていたのがよく分かっていなかったけれど、これで納得できたよ。馬鹿囃子の中にお吉も含まれていると感じていたからなんだね。」

ウ 生徒C 「現代とは異なる時代設定だったけど、読みやすかったな。主人公の心情だけではなく、茂七やお里、お吉の心情もていねいに描いていたからだね。」

エ 生徒D 「私は、『おとし』を『かの女』と表現していた部分が面白かったわ。ここでは主人公の『おとし』というより、お吉を笑っていた中の『一人』としての印象を強くしたかったんじゃないかしら。呼び方ひとつで印象がガラッと変わるわね。」

※問題は以上